女流棋士

カロリーナ・ステチェンスカ さん

「スペシャルインタビュー Vol.8」

何事にも飛び込む勇気を忘れず、女流棋士として人生を懸ける

カロリーナ・ステチェンスカさんが、将棋に出会ったのは16歳の時です。日本語が話せないまま、「日本で女流棋士になりたい」という夢を追い求め20歳で来日し、2017年に外国人初の女流棋士になりました。将棋に人生を懸けるその想いを語ってもらいました。

漫画で知った将棋の魅力

漫画オタクだった私が将棋を知ったのは、ポーランド語に訳されていた日本の漫画『NARUTO(ナルト)』です。登場人物の奈良シカマルが指していた将棋の場面で、チェスに似ているけれども、取った相手の駒を、自分の駒として使えることが不思議でした。インターネットで将棋のことを調べ、興味を持ったので、インターネットの将棋対戦サイトを利用して、毎日将棋の勉強をしました。

当時、ポーランドでは将棋をする人はほとんどいませんでしたから、友人と一緒に将棋クラブを結成し、カフェなどで対局を重ねました。実は、将棋盤や駒を買えず、ワインの木箱で将棋盤をつくり、手製の紙の駒で指していました。懐かしい思い出です。

学問と将棋。二足のわらじを履く

高校卒業後、ワルシャワの大学で情報工学を学びながら、将棋の勉強を続けていました。その頃には、将棋の腕を上げ自信もありましたから、2011年にフランスで行われた国際将棋フェスティバルに出場しました。成績は、女性では最高成績の4位になり、さらに自信が増しました。

2012年、まだ20歳でしたが、海外招待選手として出場した第2期女流王座戦一次予選の1回戦で、女流棋士の高群佐知子さんに勝利することができました。このことは私が将棋の道へ歩み出す大きな一歩となりました。

翌年に行われた第3期女流王座戦一次予選の1回戦でも、女流棋士の鹿野圭生さんに勝利し、2勝目を挙げました。この年、私は日本で女流棋士をめざすために、山梨学院大学経営情報学部に編入しました。学問と将棋。二足のわらじを履く覚悟を決めた時です。

大逆転できる将棋の醍醐味

ヨーロッパでは、チェスが主流ですし、囲碁も人気です。でも、私は持ち駒の使い方次第で対局の流れを変えられる将棋が性に合っていると思います。

チェスは、相手の駒(ピース)を奪っても使えないので、盤(ボード)からどんどん駒が少なくなり、結局、引き分けという場合もあります。ところが、将棋は奪った相手の駒を持ち駒として、いつでも使えます。盤の上だけの勝負ではなく、互いの持ち駒の使い方によって、対局の流れを一手で変えられます。この醍醐味は、他のボードゲームでは味わうことができないでしょうね。

将棋の駒は、チェスの駒よりも動きが制限されていて、戦い方は慎重にならざるを得ません。駒の動きの最大の違いは、それぞれの陣地で前列に並ぶ「歩」と「ポーン」の動きです。歩は一つずつ前進するだけですが、ポーンは最初の前進は2コマでき、斜め前の相手の駒を奪うことができます。また、ポーン同士ではアンパッサン(通過捕獲)という特別なルールがあり、アクティブな動きが可能です。

チェスでは「プロモーション(昇格)」、将棋では「成る」にも違いがあります。歩は金にだけ成れますが、ポーンはキング以外の4つの駒にプロモーションできます。だいたいは、4つの駒の中で一番強いクイーンになることが多いので、対局も華やかなイメージですね。このように、駒(ピース)の動きの違いから、チェスは最初が肝心で、いかにダイナミックに戦略を立てるのかが重要です。

しかし、将棋は、相手の差し手を探りながら陣地を固め、じっくりと相手の隙をみつけ崩しにかかります。相手の駒を奪うことができれば戦力が増しますが、これはお互い様です。攻めすぎて駒を奪われればピンチになりますし、逆に奪えればチャンスになります。

将棋は、最初から最後まで気を緩めることができません。戦略的に駒を進め、相手の差し手を予測し守りながら攻める必要があります。ここに、私は将棋の美しさと楽しさを感じています。

写真:日本将棋連盟

自身のプレッシャーに打ち勝つ

女流棋士をめざし、2013年6月に研修会に入会しました。本格的に将棋に向き合いましたが、負けると落ち込みます。落ち込むと負け続けてしまうので、その状況を抜け出すきっかけをいつも探しています。時には、師匠や先輩方からのアドバイスが助けになることもあり、2015年10月に女流3級になりました。ここから、2年以内に女流2級にならなければ、研修会に逆戻りです。2017年2月、無事に女流2級に昇級し、2ヵ月後には女流1級になりました。思い返せば、将棋の昇級と並行して、大学の卒業と大学院への進学も重なりましたから、人生初と言えるほど辛い時期を過ごしました。

今は、2018年3月に大学院を卒業し、女流棋士一筋の生活で初段をめざしています。昇段するには勝ち続けることが一番の早道です。集中力を維持できるように精神を養い、連勝し続けられるようにプロの棋士として自らの生活を見直し、自分自身に厳しくしています。これからは人生を懸けて、一局一局が真剣勝負です。

Karolina Krystyna Styczyńska

1991年、ポーランドの首都ワルシャワ生まれ。外国人女性として初めて研修会に入会し、女流棋士資格を取得。師匠は片上大輔七段。16歳で将棋に興味をもち、ワルシャワの大学で情報工学を学んでいた20歳の時に初来日。2013年に山梨学院大学経営情報学部に編入、その後、同大学院社会科学研究科修了。現在、女流棋士として初段をめざしている。